

「環境ISOの有効活用と活動の見える化に向けて」

本日の総括

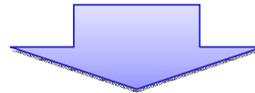
西尾 チヅル
筑波大学大学院ビジネス科学研究科

総括1

- 環境ISOは、環境パフォーマンスを向上させるために、マネジメントシステムの仕組み自身を変革したり、システムの存在を組織内部だけでなく、外部(ステークホルダー)に見える化する上で有効な手段
 - 環境ISOは、EMSを管理・維持するための共通のフレームワークであり、EMSの存在を**見える化するための手段**
 - 組織風土の違う組織が、EMSの存在を確認したり、組織連携したりするための**コミュニケーション手段**
 - 返上したら組織間でコミュニケーションが困難になる

総括2

- 統合認証、グローバル展開、サプライヤーへの環境ISOの導入などによって、関連する市場全体の環境パフォーマンスが向上し、環境保全型社会の構築を促進する
→ “点から面へ” “一組織の活動から組織間連携へ”



- 環境ISO導入主体の拡大による「規模の経済性」
- 組織間での知識共有による「範囲の経済性」
- 競合企業、消費者、メディアによる「増幅効果」

しかし実際には環境ISOの取組みやEMSは形骸化しがちである

■ パナソニック社

「環境経営」 = 「事業経営」
エコプロダクト=EMSの見える化
市場の反応=EMSの評価

■ ブリヂストン社

「統合認証」による全社一丸となった取組み
「内部監査」により従業員自らがEMSの成果を確認



★形骸化させない仕組みとEMSの成果を確認できる仕組み
があること

→ 環境ISOの有効活用と活動の見える化のカギ